

21 世紀の戦争と平和

- 20 世紀を振り返って -

平成 11 年度

安全保障国際シンポジウム報告書

日時：平成 11 年 10 月 7 日、8 日

場所：グランドヒル市ヶ谷（東京都新宿区）

主催：防衛研究所

平成 12 年 3 月

防衛研究所

まえがき

本報告書は、平成11年10月7日(木)および8日(金)の両日、グランドヒル市ヶ谷において開催された第2回安全保障国際シンポジウム「21世紀の戦争と平和 20世紀を振り返って」に提出された招聘者の論文を収録したものである。

今回の安全保障国際シンポジウムの狙いは、西暦2000年の節目を迎えるにあたって、「戦争の世紀」と称される20世紀を総括し、新たに始まる21世紀の戦争と平和への洞察を深めることにあった。

人類の闘争史は人類誕生にまで遡る。闘争は絶えることなく繰り返され、今なお地球上の各地で武力紛争が展開されている。国家は主権と国益と威信をかけて戦い、民族は独立を求め、またイデオロギーや宗教上の理由から、既存の国境を越え、あるいは一国内で戦っている。これらを戦争や紛争と名付け、戦いに勝利するために、あるいは侵さず侵されず安全を維持するために人類は知恵と力を振り絞ってきた。

孫子以来、マキャベリ、クラウゼヴィッツ、ジョミニ、モルトケ、マハン、ルーデンドルフ、ドゥーエ、リデル・ハート等によって、戦争を考察するためのフレームワークの構築、あるいは戦争と戦略の理論化の試みが営々となされ、これら試みが今日における近代軍事思想をもたらしたのである。当然のことながら、実戦を通して軍事思想の発展に多大な影響を与えたナポレオンを無視できない。ナポレオン戦争によって、「国民」が誕生したが、このように戦争は政治社会の革命的变化をもたらすことがある。16世紀以来の軍事思想の発展を経て、20世紀の現在、「軍事革命(RMA)」の議論がなされるようになった。この議論においては、国際社会の革命的变化を軍事革命として捉える。戦争形態の変化は、この国際社会の革命的变化の表面的な一部にすぎず、軍事と一般社会の双方において絶えず繰り返される革命的变化を本質的に同一のものとして考えるべきである。

従って、20世紀の戦争を議論するためには、軍事思想の変遷や軍事革命のみならず、中世封建社会の崩壊をもたらした16世紀ヨーロッパにおける戦争からナポレオン戦争、ドイツ統一戦争に至るまでの戦争を無視することは許されない。さらに言えば、20世紀の戦争を総括し、来たる21世紀の戦争を考察するためには、戦争史の学問的蓄積が必要なのである。このことを背景に、本シンポジウムでは包括的なアプローチでテーマに取り組むことにした次第である。19世紀以前の国家間の戦争、グローバルな規模の総力戦であった第一次および第二次の両世界大戦が起きた。その後、米ソ両超大国が対立し合った冷戦期においては周知のように核兵器を保有し、軍事的超大国であった米ソ

の対立の中で、東西の2極構造が成立した。現在のポスト冷戦時代においては、エスニック問題、宗教上の問題や経済的な対立を背景に、地域紛争の発生を見ている。

20世紀末の湾岸戦争、コンボ紛争において、戦争目的、および参戦・介入の正当性に関する議論が起こった。一方、高度に発達を遂げた兵器技術、卓越した空軍の戦略、そしてコンピューター社会が可能にした映像を伴う情報と報道は、犠牲の局限化をもたらした。こうして、軍事力を行使する主体の先進諸国において国民世論が意志決定に大きな影響を及ぼすとともに、多数国間のコンセンサスが必要不可欠になるなど、新たな課題を提示した。

国際社会は、戦争を未然に防止し、安定した安全保障環境を構築するために、新たな世界秩序を模索している。今日における多国間協調と同盟関係の共存状況では、国家間に軍事的・経済的不公正や競合が生じ対立に至らないような調和が求められている。これまで平和と安定を国際社会にもたらすためになされてきた努力は、今後新たな秩序がいかにかその機能を円滑に発揮できるかに向けられるであろう。その過程において、国家間あるいはグループ間に必然的に生ずるであろう摩擦を解消するために行使される軍事力の効果について、新たな認識の安全保障レジームが発展するであろう。

その意味で、本シンポジウムが、「21世紀の戦争と平和」に関する議論を通して国際社会の安定に寄与する契機となれば幸いである。シンポジウム会場において熱心に聴講された方々のみならず、より多くの安全保障に関心を寄せられる方々の参考に供するとともに、防衛政策にも資することができるよう、ここに本報告書をまとめる次第である。

本報告書は、討議に参加された遠来の各国ゲストの発表のほか、残念ながら来日できなかった中国の袁明教授のご快諾を得た発表原稿、開会に当たり就任直後にもかかわらずご来駕がかない所見の一端を述べられた瓦力防衛庁長官のご挨拶、そして、当防衛研究所長大越康弘の開会挨拶を収録している。

本報告書の作成にあたっては、庄司第一戦史研究室長以下、相澤、石津、立川の各主任研究官、進藤、高橋の両教官の献身的な協力を得、また刊行に伴う事務を長尾研究調整官が担当した。

平成12年3月1日

第2回安全保障国際シンポジウム議長
防衛研究所 戦史部長 林 吉永